

令和4年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月7日実施)	総合評価(3月24日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>①研究開発に取り組んだ成果を地域の高校へ普及する。</p> <p>②学力の充実を目指し、バランスの取れた教育課程を編成する。</p> <p>③英語教育の推進により、生徒の英語力の向上を図る。</p> <p>④主体的に学ぶ意欲を高め、探究活動を充実させる授業改善に取り組む。</p>	<p>①授業力向上推進重点校としての3年間を見据えた研究テーマを設定し、生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める。</p> <p>②新しい観点別評価について理解を深め、指導と評価の一体化について研究する。</p> <p>③英語教育の推進に向けた取組を充実させる。</p> <p>④総合的な探究の時間において、生徒が自身の学びを分析する力を育成する。</p> <p>④ICT機器を活用した授業改善の工夫として、一人一台端末による学習形態を研究する。</p>	<p>①指定1年目である本年度は、「対話的な学び」を重点とした授業改善を行い、公開授業を実施する。</p> <p>②新観点について理解を深め、観点別評価方法の具体例を模索する。</p> <p>③外部検定試験の受検機会を増やすとともに、4技能定着に向けた教科指導法について研究する。</p> <p>④キャリアパスポートを活用し、総合的な探究の時間を振り返る。</p> <p>④一人一台端末の活用を全教科で実践し、学習形態の研究・確立を目指す。</p>	<p>①公開授業を実施し、参加者との意見交換を通して課題を把握し解決に向けた手立てについて検討できたか。</p> <p>②職員研修会を通して新観点について理解を深め、観点別評価方法の具体例を模索できたか。</p> <p>③外部検定試験の受検者を増やす環境を整えたか。</p> <p>また、4技能定着に向けた教科指導法について研究を進めることができたか。</p> <p>④キャリアパスポートを活用し、総合的な探究の時間を振り返ることができたか。</p> <p>④全教科で一人一台端末を活用し、学習形態について研究・確立することができたか。</p>	<p>①11月18日に実施した公開研究授業を通して、「対話的な学び」を重点とした授業について教員の理解が深まった。</p> <p>②各教科で新観点について理解を深めた後、専門の指導主事との質疑応答により、観点別評価方法や指導方法の具体例を模索した。</p> <p>③英単語コンテストを全学年で実施するとともに、Speakingを含む英語外部検定試験を希望者対象に実施し、実践的コミュニケーション能力を育成した。</p> <p>④進路や福祉に係る探究的活動を行い、発表形式でその内容を共有した。しかしながら、紙媒体のキャリアパスポートを有効に活用できなかった。</p> <p>④一人一台端末の活用にあたり、振り返りを電子データで提出するといった方針を立てた。</p>	<p>①「対話的な学び」の実践を踏まえ、令和5年度のテーマである「主体的な学び」の実現に向けて、授業スタイル等を研究していく。</p> <p>②「主体的に学習に取り組む態度」と他2観点の整合性について学校としての考えを整理する。</p> <p>③英語4技能の向上の指標とするために、英単語コンテストを継続するとともに、英検を受検する生徒の数を増やしていく。</p> <p>④「仮説→実証→考察」といった本校の探究活動の骨組みを全学年で活用する。また、キャリアパスポートを電子データ化して、生徒一人ひとりが管理するようにする。</p> <p>④一人一台端末の授業や家庭学習等での活用方法を引き続き研究していく。</p>	<p>授業改善を今後も継続して行ってほしい。その際、「主体的・対話的で深い学び」は切り離して実現できるものではないことを意識するとよい。対話を通して気付いたことについて、主体的に学びを深められるとよい。</p> <p>1年間の目標は、可能な限り数値化するとよい。一人一台端末の活用にあたっては、端末を使うことが目的とならないようにしてほしい。また、今後は、生徒によるAIの使用をどこまで認めるかなども考えていかななくてはならない。キャリアパスポートについては電子化を進めてほしい。中学との連携が図ればなおよい。</p>	<p>①「対話的な学び」に焦点を当てた授業スタイルが広まったことが成果であるが、「主体的な学び」との有機的なつながりについての意識が醸成できていない。</p> <p>②「主体的に学習に取り組む態度」と他2観点の整合性について学校としての考えを整理しつつ、その観点別評価を適切におこなうための授業スタイルや評価方法の研究が課題である。</p> <p>③英単語コンテストや英検の受験を通じて、生徒のコミュニケーション能力を高めることができた。4技能の形成的評価についてさらに検討を進めていく。</p> <p>④総合的な探究の時間で、課題発見から「仮説→実証→考察」といった骨組みを取り入れたプレゼンテーションが分かりやすく、内容も充実していた。その骨組みを全学年で活用していくことが必要である。</p> <p>④キャリアパスポートの電子データ化を進め、生徒一人ひとりが管理できるようにする。中学校からのキャリアパスポートの引き継ぎが課題となっている。</p> <p>④一人一台端末を活用した家庭学習については一定の成果があった。今後は、授業での活用方法の研究が必要である。</p>	<p>①研究授業や職員研修等を通じて「主体的な学び」の実現に向けた授業スタイルや評価方法を研究する。</p> <p>②学習支援グループが、「主体的に学習に取り組む態度」と他2観点の整合性について原案を作成する。その上で、評価方法について校内でコンセンサスを取る。さらに指導主事等とも意見交換する。</p> <p>③英検2級取得を卒業までの目標とし、4技能定着に向けた教科指導法について研究を進める。</p> <p>④総合的な探究の時間で、「仮説→実証→考察」までの探究活動の骨組みを全学年で共有する。また、ICT機器を有効に活用する。</p> <p>④生徒一人ひとりが管理できるようにキャリアパスポートの電子データ化を進める。中学校からの引き継ぎについては、今後学校運営協議会の委員と検討していく。</p> <p>④一人一台端末を活用した授業や家庭学習の実践例を増やし、より効果的な活用方法について研究を進めていく。</p>
2 生徒指導・ 支援	<p>①礼節を重んじ規範意識を高める。</p> <p>②教育相談体制を充実させ、生徒一人ひとりに対しきめ細かな支援を行う。</p> <p>③生徒会、委員会活動、部活動を通して責任感や連帯感の涵養を図り、自己肯定感を育む。</p>	<p>①他者との好ましいコミュニケーション能力を育成する。</p> <p>②SCや外部専門機関と必要に応じて連携し、課題を抱える生徒の支援に当たる。</p> <p>③学校行事等企画・運営を通して、生徒の自主性を育成する。</p> <p>③生徒が安心して参加できる学校行事を企画・運営する。</p>	<p>①あいさつの励行を継続し、生徒が近隣住民にも会釈できるようにしていく。</p> <p>②教員間での情報交換を密にして困っている生徒を早期に発見・共有し、組織的に支援する。また、行動観察や面接等に加えてGAP調査の結果も活用することで、問題行動の未然防止を図る。</p> <p>③学校行事を生徒自身が主体的に取り組み、企画立案するとともに、生徒が進んでルールを策定できるよう支援体制を</p>	<p>①あいさつに関するアンケートを実施し、生徒の実情を把握し評価の観点とする。</p> <p>②課題を抱える生徒に対して効果的な支援ができたか。</p> <p>③学校行事等を通して、コミュニケーション能力を高め、主体的・積極的に活動できたか、また生徒の自主性を育成することができたか。</p> <p>③GAP調査を実施し、生徒の自己肯定感が増加したかを評価する。</p>	<p>①「学校の近隣で挨拶しようとしている」生徒の割合が、昨年度の35%から42%に増加。</p> <p>②学年会で気になる生徒の情報を積極的に交換した。必要に応じて外部機関と連携しながら個々の生徒に対して組織的支援を実施した。</p> <p>③コロナ禍で、主な学校行事を開催することができたことは、生徒にとって達成感につながった。</p> <p>③自己肯定感を10段階で点数化した値が、5月から11月にかけて、1年生が減少。2、3</p>	<p>①あいさつの大切さを考えさせる取組を継続していく。職員と生徒の意識をさらに高めていく。</p> <p>②生徒からの相談が集中する4、5月に、迅速にSCやSSW、児童相談所につなげる必要がある。</p> <p>③各行事が生徒主体で運営できた。文化祭は3年ぶりに実現した。今後、コロナの感染状況を鑑みながら行事の内容を迅速に変更できるようにする。また、文化祭での地域交流について、その方法を検討する。</p>	<p>挨拶の励行は、効果が出てきている。今後は、あいさつをすることで何が良かったかを振り返らせるなど、生徒の意識を高める方策を具体的に考えてほしい。</p> <p>GAP調査で、1年生の自己肯定感が下がっているのはリアリティショックのため。新入生への支援を考えてほしい。校則を見直す取組みは良かった。こういった取組みをする高校を志望する中学生は多いと思う。</p>	<p>①近隣で挨拶しようとしている生徒の割合が7ポイント増加したことは、大きな成果と考える。今後も挨拶の大切さを生徒に伝えていきたい。</p> <p>②児童相談所等の外部機関と連携しながら対応した。これからも、必要に応じてケース会議等を開催し、課題の早期対応に努めたい。</p> <p>③コロナ禍で、主な学校行事を開催することができたことは、生徒にとって達成感につながった。こうしたことが自己肯定感の高まりにつながるとよい。</p> <p>③1年生で、自己肯定感が高い生徒が、11月に有意に減少した。リアリティショックを和らげる取組みについて工夫する必要がある。</p>	<p>①朝のホームルーム等教育活動の様々な場面で、挨拶することがなぜ良いかといったことを伝えていく。</p> <p>②SC・SSWの各校配置及び「かながわ子どもサポートドック」を効果的に活用し、課題の早期発見・早期対応に努める。</p> <p>③学校行事を可能な限り再開していく。その際、単純にコロナ前の形態に戻すのではなく、生徒による動画の作成・上映など、コロナ禍で進化した取組みも継続していく。</p> <p>③1年の担任等と連携し、新入生が何を期待して入学したのかなどを把握してリアリティショックを和らげる方策を考える。</p>

	視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月7日実施)	総合評価(3月24日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	①キャリア教育を充実させ、社会でより良く生きるための諸能力を育成する。 ②「行きたい」上級学校への進路実現のため、進路ガイダンスの充実を図る。	①「行けるところ」でなく「行きたいところ」を目指すような進路指導に、進路支援Gが中心となって、組織的に取り組んでいく。②キャリアパスポートの運用を元に、生徒自身が将来を見据えた進路実現を達成するための支援を行う。	①3年間を見通した模擬試験を計画する。また、学年に応じた進路ガイダンスや講演会を計画的に実施し、「自立への道」の活用や上級学校訪問等で進路実現の支援を行う。 ②オープンキャンパスやインターシップ・看護体験等への参加を促す。参加した生徒には、キャリアパスポートを活用した振り返りを通して、卒業後の進路について深く考えさせる。	①生徒対象のアンケートにおいて、生徒にとって有意義な取組みを実施できたかを評価する。 ②生徒が主体的に進路を決めることができたかを、HRや三者面談と通して見取る。	①河合塾やスタディサプリの確認テストを組み入れた年間の模擬試験計画を作成した。(令和5年度用)3年生に「自立への道」の活用を促し、進路選択の際に参照させた。また、74%の3年生が、希望の進路に役立つ補習・講習を受けたと回答。 ②キャリアパスポートに各学期の授業、学校行事、部活動、校外活動などについて、事前に見通しを立てさせ、事後に振り返りを記入させ、自己の取組みを評価させた。	①これまで学年がスタディサプリアプリを運用してきたが、進路支援Gがそういったサービスの担当窓口となる。そして、その活用を充実させる方策を学校全体で考えていく。進路ガイダンスや講演会及び上級学校訪問を含めた校外活動をより充実したものにしていく。 ②キャリアパスポートの運用について、各自、端末の機能を利用して電子データ化し、中学校から送付されたものから高校の探究に接続させていき、卒業後の進路選択につなげていく。	教員を志望する中学生は多い。高校生にも興味を持ってほしい。小学校などを見学に行くのもよいと思う。また、ロータリークラブは、地元企業を紹介する取組みを行っているので、機会があれば利用してほしい。キャリアパスポートを使うことで、中学との連携が図れればよい。	①分野別説明会等を開催することで、3年間を見通したキャリアデザインを意識化することができた。卒業後の自分を想定し、自己実現に向けて必要なことは何かをより具体的・現実的に考える機会を与える必要がある。 ②キャリアパスポートの運用について共通理解を深めることができた。具体的には、学期ごとの振り返りをさせ、将来に向けた見通しを立てさせることができた。	①総合的な探究の時間、地域や関係諸機関との連携などを通して、3年間を見通した進路指導計画を立てさせて、生徒の進路支援に当たる。 ②生徒一人ひとりが管理できるようにキャリアパスポートの電子データ化を進める。中学校からの引き継ぎについては、今後学校運営協議会の委員と検討していく。 ③外部機関と連携したインターシップを実施し、生徒自身のキャリアプランニング能力を高める。
4	地域等との協働	①コミュニティ・スクールとして地域に開かれ、地域とともにある学校づくりを目指す。 ②ボランティアバンクの充実を図り、地域と連携した活動を推進する。 ③地域のソーシャル・キャピタルを積極的に活用する。	①学校の教育活動を広く発信することなどで、地域に愛される学校を目指す。 ②ボランティア活動等により、地域との連携を深める。 ③曾屋塾と福祉体験講座を充実させる。	①生徒と話し合いながら、HPの動画をリニューアルする。HPをこまめに更新し、中学生と保護者に本校の魅力を発信していく。①生徒会や部活動が地域施設、近隣小中などに出向いて「教室」を実施する。②ボランティアバンクを設置し、ボランティアを希望する生徒とボランティア先とを効果的につなぐ。③曾屋塾での自学が進路実現につながる点を紹介し、曾屋塾の塾生を増やす。福祉体験講座を実施する。	①魅力的なHP動画を制作できたか。HPのこまめな更新ができたか。 ①生徒会や部活動が、学校の代表として、地域で有意義な活動ができたか。 ②ボランティアバンクを通して、生徒がボランティア活動に参加することができたか。 ③曾屋塾の塾生が増え、主体的な学びの場となったか。感染対策を講じて福祉体験講座を実施することができたか。	①HPの更新はスムーズに行うことができた。新たに動画をアップし、本校のPRに大きく貢献した。 ①ダンス部、軽音楽部、美術部、写真部、書道同好会が地域で活動した。 ②ボランティアバンクを設置したが、募集数が少なかつたため、生徒とのマッチングができなかった。③曾屋塾を修了した生徒は16名で、昨年の33名と比べて半減したが、生徒は主体的に学び、塾生の中の2名が、自主的に英語で学校紹介動画を作成した。	①各教科からも、授業の取組み等をHPに掲載して、さらなる情報発信をしていく。 ②ボランティアバンクに加えて、Google Classroomでもボランティア募集について周知する。 ③福祉体験は次年度のコロナ後の実施に向け、受け入れ団体との連絡を密にしていきたい。 ③曾屋塾の塾生の数を目標にするのではなく、「行きたいところに行く進路実現」について教員の意識をさらに高めた。	地域と関わることで、自己肯定感が高くなる。地域連携では、その視点を持つこと。今後、地域の行事が再開されていくので、高校生に参加してほしい。また、ボランティア活動に係る情報をなるべく多く収集して生徒に紹介してほしい。HPに学校紹介の動画を掲載した効果は大きかった。秦野曾屋には、生徒会に積極的に参加したい中学生が多く志望しているといった印象だ。	①HPの更新を迅速に行い、掲載内容を整理して、効果的に情報発信することができた。また、生徒が作成した動画を見た中学生が入学を志望したことが分かった。 ②ボランティアバンクを設置したが、募集数が少なかつたため、生徒とのマッチングができなかった。 ③少人数の参加者であったが、福祉体験を再開できた。しかしながら、コロナのために、ボランティアを受け入れられなかった医療・福祉機関が多かつた。 ③曾屋塾を修了した16名の生徒には達成感が見られた。今後、曾屋塾を通して、主体的な学びを支援していく。	①引き続き、HPの更新を迅速に行う。また、生徒が作成した動画をより多く掲載し、本校の「ありのままの姿」を広く発信していく。 ②ボランティアバンクに加えて、Google Classroomでもボランティア募集について周知する。 ③福祉体験は次年度のコロナ後の実施に向け、受け入れ団体との連絡を密にしていきたい。 ③曾屋塾において、生徒が要望する数学の講座を開設し、幅広く、チャレンジ精神の旺盛な人材を育成していく。
5	学校管理 学校運営	①防災体制を確立するとともに、生徒の防災意識を高める。 ②学校内の教育環境をより一層整備する。	①生徒一人ひとりが大規模災害発生時に何ができるか、どう避難するかなどを自ら考える機会を設定する。 ②保護者と生徒、教員が一体となった美化活動を行う。 ③環境教育の充実を図り、美化委員会の積極的な活動を支援する	①DIG訓練等を通して、生徒が自主的に防災に取り組む姿勢を育成する。 ②PTAやおやじの会と協力して教育環境を整備する。また、日常の清掃活動をしっかり行う。 ③美化委員が自ら考える姿勢を育成するとともに、校内美化に取り組む態度を育てる。	①避難訓練やDIG訓練が効果的に実施できたか。 ②これまで以上に校内の美化が図れたか。 ③文化祭等の行事で美化委員が自主的に活動し、積極的な校内美化活動が展開されたか。	①防災訓練、机上避難訓練、DIG訓練を計画通りに行い、職員と生徒の防災意識を高めた。 ②PTAと連携し、美化委員も参加して校内美化活動を行った。またおやじの会によるタイルの修復作業や中庭の清掃を行った結果、教育環境が整備された。 ③地域貢献活動時の生徒のグループを少人数にした結果、生徒はより責任感を持って清掃に当たった。	①来年以降も同様の訓練を行い、生徒の防災への取組みを啓発していく。 ②コロナ禍の中での生徒と保護者のふれあい作業について、感染防止等をしっかり行った上で、今後も可能な限り実施していく。 ③今後も地域貢献活動を継続していく。	DIG訓練は効果的だと思う。遠隔地から通学する生徒もいるので、そういった生徒も含めたような防災教育が必要である。学校は避難所になるので、災害時には必要な対応をしてほしい。	①DIG訓練と併せて、「自助・共助・公助」の「共助」の部分で高校生としてどのように行動すればいいかを考えさせる研修を行った。その結果、災害時に地域に対してどのように貢献できるかといったことを考えるよい機会となった。今後もそのような機会を多く設けていきたい。 ②③PTAと連携して校内美化を進めることや学校行事の活性化を進めていきたい。	①今後も年3回以上の防災訓練を行い、生徒と職員の防災意識を高めていきたい。また、DIG訓練を通して地域との連携を踏まえた防災教育を行っていく。 ②ふれあい美化清掃をコロナ禍前の状況に戻し、地域との連携を深めていく。 ③地域貢献活動、美化委員の活動や通常の清掃活動を通して校内の教育環境の美化を進めていく。